

都会の庭 命を育む

街には多くの鳥や虫たちが暮らし、点在する庭の緑が貴重なすみかになっています。全国の庭にどのくらいの生きものがいるのか、NPOが今年初めて調査しました。また、庭に自生種を植えたり、野鳥が訪れるやすい造りにしたり、住宅建築でも生きものへの配慮が広がっています。(吉川一樹)

東京都豊島区の村上政美さん

(48)は今年、「お庭の生きもの調査」に参加した。NPO法人生態教育センター(東京都東村山市)の募集に応じ、5~8月の4ヵ月間、ほぼ毎朝、庭の生きものを観察し、記録した。

村上さん宅には、約50平方㍍の庭がある。半分ほど芝生が敷かれ、ソヨゴやサンショウなど自生種を多めに植えている。

調査のときは、デジタルカメラと昆虫図鑑を手に庭に出た。芝生には、ズメがミミズを食べに何度も来た。メジロは一度だけ見えた。木の幹にハラビロカマキリの卵のうが残っていて、アシナガバチも目撃。約30種の生きものを見つけた。「都会の庭にもこんなに生きものが来るんだと驚きました」と村上さん。

この調査は、同センターが積

ハスの協力で参加者を募り、47都道府県から都市部や農村部に住む906人が参加。都市部の割合がやや多かった。「個人の庭を対

NPO調査 東京の民家、メジロなど30種



りの環境と生きものとの関係も浮かんだ。
同センターの小河原孝生理事長
(59)は「生物多様性というと熱帯

家作りも生態系に配慮

家を建てる際も、生きものに配慮する動きが広がっている。

広島市佐伯区に今年5月、木造2階建てのモデルハウス「安芸町家」が完成した。シンプルな外観で、家の中に地元産のスギがふんだんに使われている。

戸建て住宅現代町家の一つ。

全国71の工務店でつくる「町の工務店ネット」が、「コンセプトを共

有して建てている。昔の町家のようないい街並みをつくること、太陽熱などの自然エネルギーを活用すること、木をたくさん用いることなどをルールとしている。地

が参加したが、ミンミンゼミ、メジロ、クマゼミを見た人は100人

人に満たなかった。

安芸町家は、約3000平方㍍の敷地の3分の1近くを緑地が占め、ヤマザクラやイロハモミジなど29種を植えた。ほとんどが県内の自生種だ。庭以外のわずかな空

間に多く見られるなど、庭や周

間にもテイカカブランなどを植え、
「一坪里山」を演出した。
モデルハウスを建てた大須加建設の大須加隆社長(55)は「自生種にこだわる人はまだ少ない。『住宅に県産材を使い、お庭には自生種を植えていますよ』というPRで理解を広げたい」。

また、東急不動産(東京)は、物流倉庫が立ち並ぶ東京都江東区の臨海部に、生物多様性に配慮した15階建て144戸のマンションを建設している。屋上を緑化するほか、約120平方㍍の中庭に、野鳥が水浴びをするべく自生種を植える。

安芸町家の緑地を担当した造園家で「プランタゴ」(東京)代表の田瀬理夫さん(60)は、各地で自生種を使った庭を手がけている。「たとえ小さい庭でも自生種を植えて季節の変化を感じられれば、生活が豊かになる。そうした庭の集積が、地域の豊かな環境をつくりしていく仕組みがなければい



上 「お庭の生きもの調査」に参加した村上さん宅の庭=東京都豊島区

下 「安芸町家」の庭。自生種を植え、メダカが泳ぐ池を設けた=広島市

